

# 博多 178

—博多遺跡群第232次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1421集

2021

福岡市教育委員会

HAKA      TA  
博 多 178

— 博多遺跡群第232次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1421集



遺跡略号 HKT-232  
調査番号 1920

2021

福岡市教育委員会





石造台座1（SK52出土）



石造台座2（SK52出土）

# 序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帶水の関係にあり、古くから交流がおこなわれてきました。なかでも博多湾に面する那珂川から御笠川一帯には、古代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、集合住宅建築に伴う博多遺跡群第232次発掘調査について報告するものです。この調査では中世の井戸や近世の石積土坑を検出するとともに、南宋の影響のある石造物、陶磁器や板碑などの遺物が出土しました。これらは地域の歴史を解明するための重要な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業者様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会  
教育長 星子 明夫

## 例　　言

- 本書は福岡市が建物建設に伴い、福岡市博多区古門戸町24番地内で実施した博多遺跡群第232次調査の報告書である。
- 発掘調査および整理報告書作成は、受託・国庫補助事業として実施した。
- 実測図作成および写真撮影の実施者は、以下のとおりである。

業務内容	担当者
遺構実測図作成	常松 幹雄、藤野 雅基、坂口 剛毅
遺構写真撮影	常松
遺物実測図作成	山崎 龍雄、山崎 貢代子
遺物写真撮影	常松、牛嶋 茂
製図	常松、山崎 龍雄、山崎 貢代子

- 本文に掲載した公共座標は世界測地系で、挿図に掲載した方位は、真北を示す。
- 本文中に使用した遺構略号とその性格は、以下のとおりである。  
SD:溝 SE:井戸 SK:土坑 P:柱穴 SX:その他の遺構
- 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 卷頭図版の石製品は、牛嶋 茂氏(元奈良文化財研究所)の撮影による。
- 本書の執筆・編集は、常松が行った。

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	232次	調査略号	HKT-232
調査番号	1920	分布地図幅名	48千代博多	遺跡登録番号	0121
調査地	福岡市博多区古門戸町24番地内			調査面積	77m <sup>2</sup>
調査期間	令和元(2019)年9月3日～令和元(2019)年10月17日				
整理期間	令和2(2020)年4月1日～令和3(2021)年3月31日				

## 本文目次

I.	はじめに .....	1
1.	調査に至る経緯 .....	1
2.	調査組織 .....	1
II.	立地と環境 .....	1
III.	調査の記録 .....	4
1.	調査の概要 .....	4
2.	遺構と遺物 .....	10
(1)	石組井戸 .....	10
(2)	石積土坑 .....	12
(3)	井戸・土坑 .....	16
(4)	金属器・錢貨 .....	24
IV.	まとめ .....	25

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区古門戸町24番地における建物建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を受理した。

これを受け埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡に含まれていること隣接地の調査が実施され現地表面下150cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建築予定部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和元年8月1日付で土地所有者を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年9月3日から発掘調査を、翌令和2年度に資料整理および報告書作成をおこなうことになった。

### 2. 調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：平成31年度・資料整理：令和2年度）

調査総括：文化財部埋蔵文化財課 課長 菅波 正人

同課調査第1係長 吉武 学

同課調査第2係長 大塚 紀宜（平成31年度）

藏富士 寛（令和2年度）

調査庶務：文化財活用課 松原加奈枝

事前審査：埋蔵文化財課 事前審査係長 本田浩二郎

同課事前審査係 文化財主事 朝岡 俊也（平成31年度）

調査・報告担当：同課 主任文化財主事 常松 幹雄

## II. 立地と環境

博多遺跡群は、箱崎砂堆に形成された砂丘遺跡で、南側の博多浜と北側の沖ノ浜が大博通と明治通が交差する付近でつながっている。調査地は、沖ノ浜の北西部の西側に緩やかに傾斜する標高44mほどの地点にある。

第1面（32m）では中世末頃の石組井戸と近世の石積土坑が検出された。

第2面（27m）では室町時代後期の土器の細片を多く混入した整地面を確認できた。

第3面（23m）の暗黄灰色砂層では北側で素掘りの井戸（最下面のレベルは0.85m）が検出された。また調査区の南で東西方向にはしる断面U字形の溝状遺構（深さ0.8m）を確認した。中世前半の鎌倉時代頃と推定される。

第4面（21m）の黄灰色砂層（地山）では第3面の溝に切られた砂層を掘りこんだ土坑が検出された。12・13世紀の平安時代～鎌倉時代頃と考えられる。

第4面の土坑から出土した凝灰岩製の石造物は、須弥壇とよばれる台座の破片である。下框の明瞭な段や足端部の調整など、同種の石造物のなかでも古い特徴がうかがえる。

今回の調査で検出した遺構と遺物から、中世の博多を解明するうえで重要な所見がえられた。

232次調査の北西に隣接する78次調査では第1面が標高30~32m、第2面が標高24~26m、第3面が標高19~22mで文化層の調査が行われた。遺構の出現は11世紀後半で、上層の1面が16世紀後半、第2面が14世紀を主体とする時期に比定される（大庭1995）。

78次調査の第1面では礎石建物跡が検出された。各礎石は、小土坑に栗石を詰めた構造で、上部の板石は確認されていない。礎石建物SB01は、2間×3間の規模で、柱間は2mをはかる。調査地の北側には室町時代に遣明使節や明・朝鮮の人々が逗留した石城山妙楽寺があり、近世以後「妙楽寺町」の名称をとどめていた。礎石建物は、戦国時代に焼失した妙楽寺の南に位置する塔頭の仏堂の可能性が指摘されている。

第3面では12世紀後半以前の埋葬遺構4基が集中して確認された。

232次調査の第1面と3・4面は、78次調査の第1面と第3面にあたり、第2面は14世紀を主体とする室町時代に相当するとみられる。

#### 【参考文献】

大庭康時編1995「博多44」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第393集、福岡市教育委員会



図1 博多遺跡群位置図 (1/25,000)

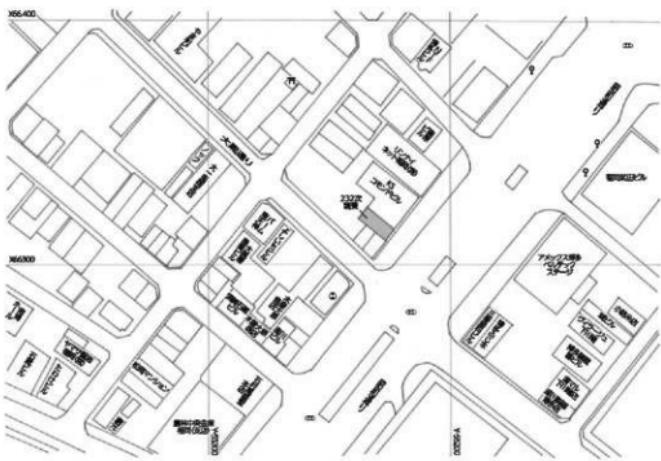


図2 博多遺跡群232次調査地周辺 (1/2,000)

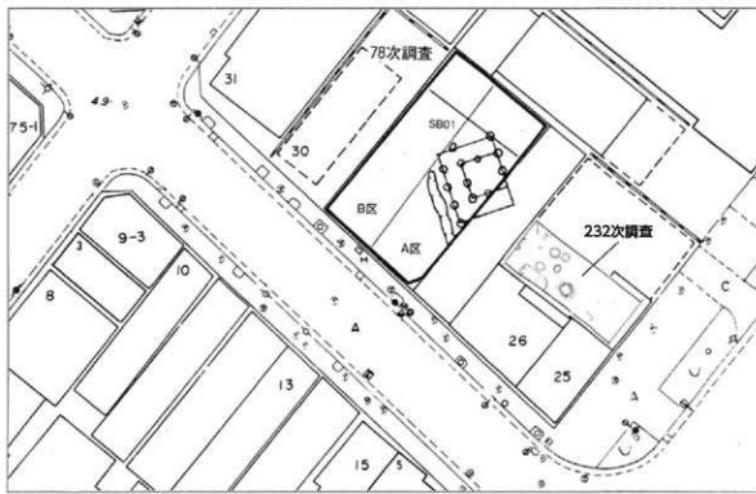
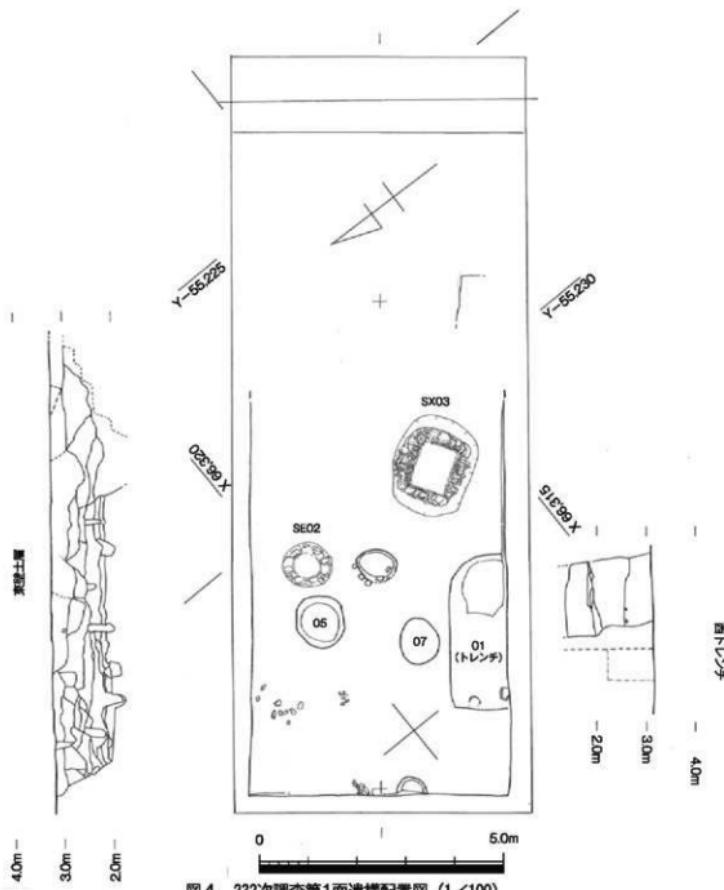


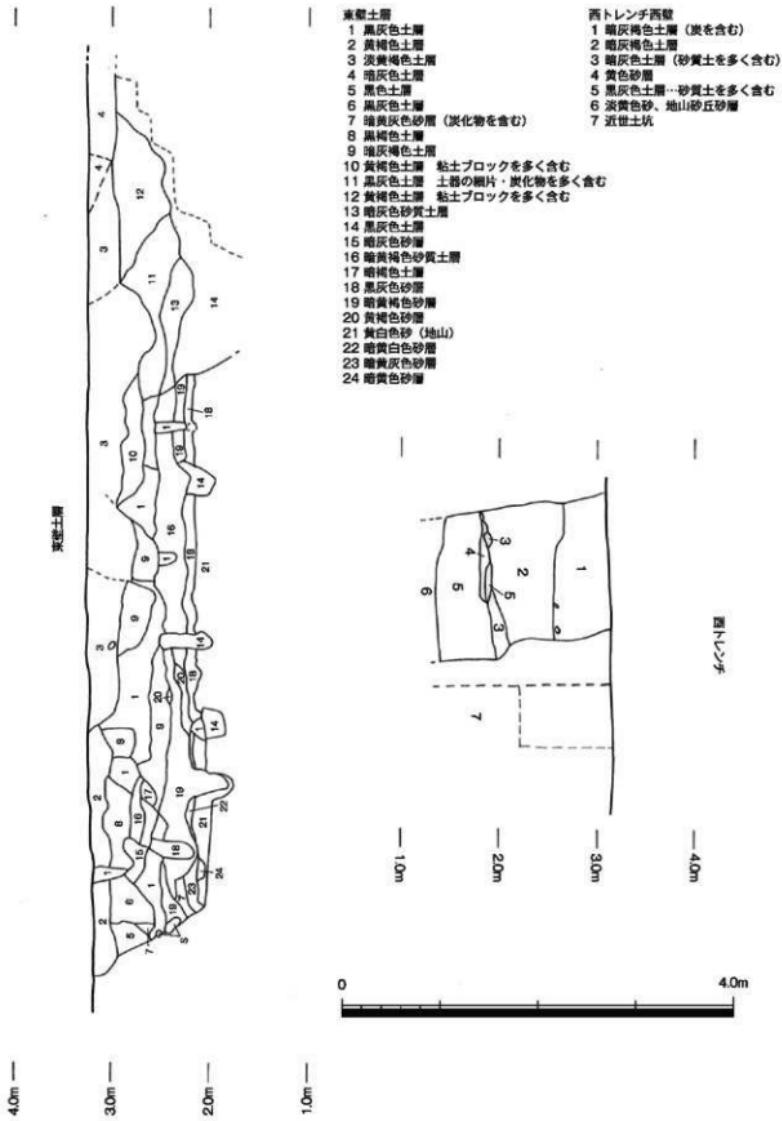
図3 博多遺跡群232次調査地点 (1/500)

### III. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

発掘調査は条件整備が整った令和元（2019）年9月の着手となった。78次調査の最上層の遺構検出面をもとに9月3日から現地表下150cmの表土掘削を開始した。9月9日に発掘機材を搬入し、第1面の遺構検出に着手した。9月21日前後には台風17号の通過により風雨が強まったが調査への影響は最小限にとどまった。9月26日に第1面の掘削による廃土の積出しを行い、第2面以下の調査を継続した。10月17日に全景・個別写真の撮影を終え、発掘機材を撤収し一連の発掘調査を終了した。





### 調査日誌

- 9月3・4日 表土掘削の立会を行う。
- 9月9日 発掘機材搬入・第1面の遺構検出を開始。
- 9月10日 第1面、遺構掘削。
- 9月11日 第1面、遺構掘削。・第1面、遺構撮影。
- 9月13日 第1面、遺構掘削。
- 9月17日 第1面、遺構掘削。・個別遺構の撮影。
- 9月18日 第1面、遺構清掃。・個別遺構の撮影。
- 9月19日 第1面、遺構撮影。・第1面、個別遺構実測。
- 9月24日 第1面、遺構清掃。・第1面、全景撮影。
- 9月25日 第1面、遺構実測。
- 9月26日 廃土搬出。・第2面の遺構検出を開始。
- 9月27日 第2面、遺構検出。・第2面、遺構掘削。
- 9月30日 第2面、遺構掘削。・個別遺構の撮影。
- 10月1日 第2面、遺構掘削。
- 10月2日 第2面、遺構掘削。・第2面、調査区全景撮影。
- 10月4日 第2面、遺構掘削。・第2面、調査区全景撮影。
- 10月7日 遺構個別写真撮影。・第2面、遺構実測。
- 10月8日 第3面、遺構検出。
- 10月9日 第3面、遺構掘削。
- 10月10日 第3面、遺構清掃。・第3面、全景写真撮影。
- 10月11日 第3面、個別遺構の撮影。・第3面、遺構実測。
- 10月15日 第4面、遺構掘削。
- 10月16日 第4面、遺構清掃。・全景・個別遺構撮影。・第4面、遺構実測。
- 10月17日 全景・個別写真撮影。・発掘機材の撤収。

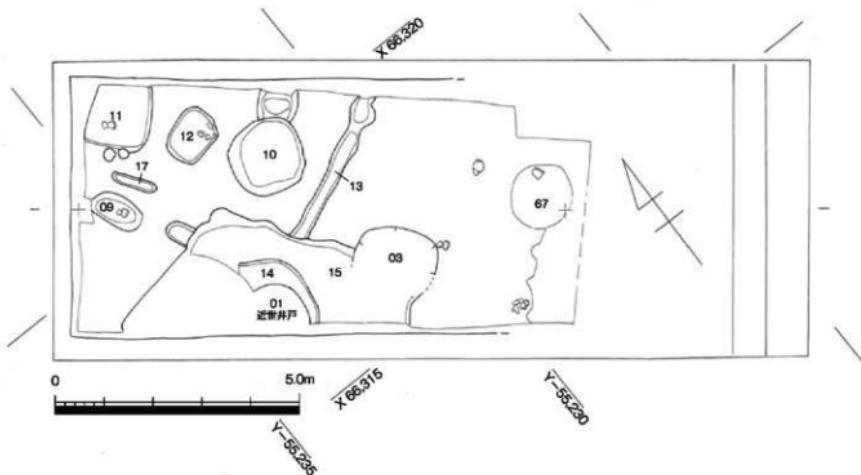


図6 232次調査第2面遺構配置図 (1/100)

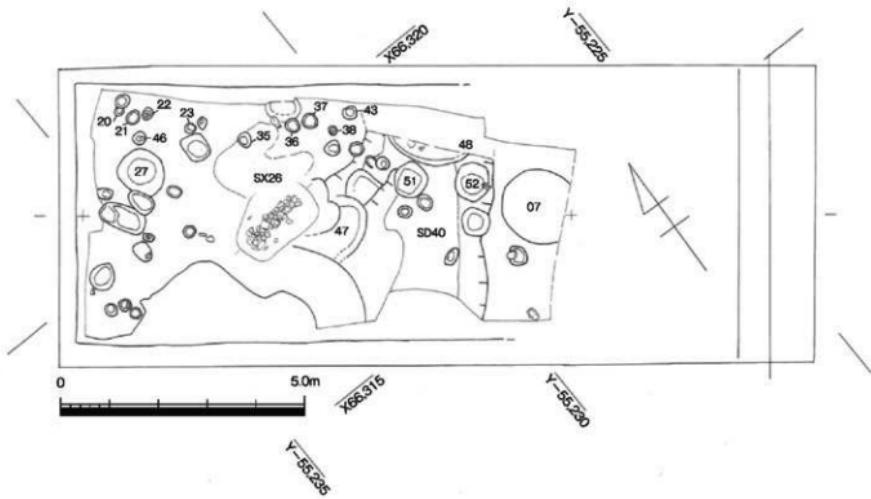


図7 232次調査第3面遺構配置図 (1/100)

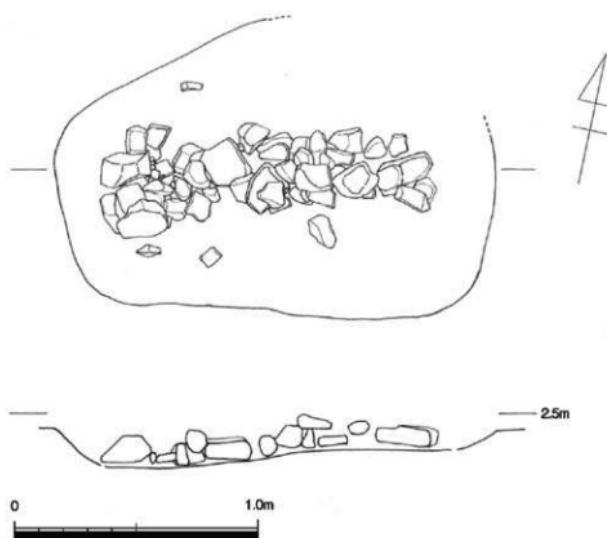


図8 232次調査第3面配石造構 (1/20)

調査区南東の歩道の高さは 4.825m。本稿では歩道に面した昭和通り側を南、調査区の奥壁を北として記述を行う。

#### 第1面の調査

第1面は地表から 1.5m 挖削した標高 3.3m で遺構検出を開始した。近世土坑の掘方が検出された西壁に沿って幅 1.2m で土層確認のトレーニングを設定した。78 次調査で検出された礎石建物の南にあたるため縦の分布に注意しながら掘り下げを実施した結果、東壁寄りで石組み井戸の存在が明らかになった。さらに井戸の北西側で 16 世紀代の石積土坑が検出された。

#### 第2面の調査

第2面は、標高 2.7m で遺構検出を開始した。中世の溝 SD13 や複数の土坑が検出された。土坑 SK09 では板碑の破片が出土した。調査区南端で確認された井戸の掘方は最終面で掘削することとした。

#### 第3面の調査

第3面は、標高 2.4m で遺構検出を開始した。3 面の遺構面はかなり砂質が多くなる。遺構では径 20 ~ 30 cm 代の柱穴が目立つようになる。北で検出された井戸 SE27 は素掘りの井戸である。東西方向の溝 SD40 や溝に沿って並ぶ花崗岩の集積 SX26 が検出された。

#### 第4面の調査

第4面は、標高 2.0m で検出された遺構である。北西隅の柱穴群と第3面の溝 SD40 に切られた土坑 SK52 なども第4面に含まれる。特出すべき遺物として SK52 で出土した凝灰岩製の石造台座がある。

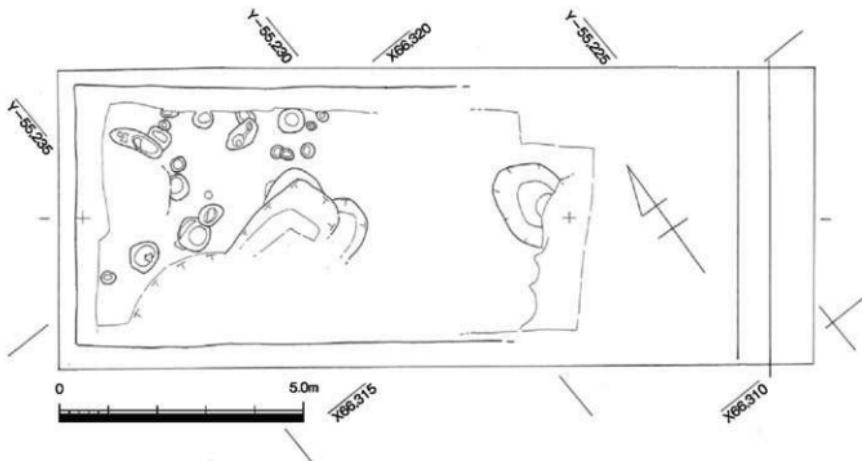


図9 232次調査第4面遺構配置図 (1/100)

## 西壁土層

西壁土層の個々については図に示したとおりである。地表の約4.8mから表土を除去した第1面（標高3.1～3.2m）は、暗黄褐色土層で近世から戦国期の遺構が検出された。近世の遺構面はさらに上面でも確認できるかもしれない。

第2面（標高2.7m）は、中世後半で井戸SE67が検出された。この面までは黒色土層を主体としている。

第3面（標高2.3～2.4m）は、砂質土層が主体となる。中世前半の面とされる。

第4面（標高2.1m）は風成砂を基盤としている。78次調査では12世紀後半以前の埋葬遺構が確認されており、本調査区でも基盤の砂層は平安後期から鎌倉時代に形成されたと推定される。



図10 232次調査 東壁土層1（西より）



図11 232次調査 東壁土層2（西より）

## 2. 遺構と遺物

### (1) 石組井戸SE02 (図12・13、図版2・3)

第1面の標高3.15mで検出された。積石の礫が5段ほど遺存している。礫は火成岩や堆積岩が使用されており2次的に被熱した礫が3割ほどを占めている。井筒の構造は不明だが、色調が黒灰色から灰褐色となる標高2.5mを暫定的に井戸の底と推定した。底のレベルは、78次調査で検出された石組井戸よりも2m近く高くなる。井戸の南側の礫には板碑や石臼の破片が使われていた。

1は、板碑の山形付近の一部で二条線がある。現存する高さは11.1cm、幅11.7cmをはかる。砂岩質である。

2は、板碑の蓮台部の破片である。現存する高さは15.7cm、幅17.8cmをはかる。被熱している。砂岩質である。

3は石臼の破片で、下臼の磨り目が観察される。暗灰色を呈し、現存長は12.4cm、幅8.8cm、厚さ6.3cmをはかる。

4は用途不明の石材。現存残存長は16.6cm、幅18.3cm、厚さ7.7cmをはかる。板碑の基部であろうか。

5は用途不明の石材である。現存残存長は21.4cm、幅15.0cm、厚さ5.6cmをはかる。板碑の一部であろうか。

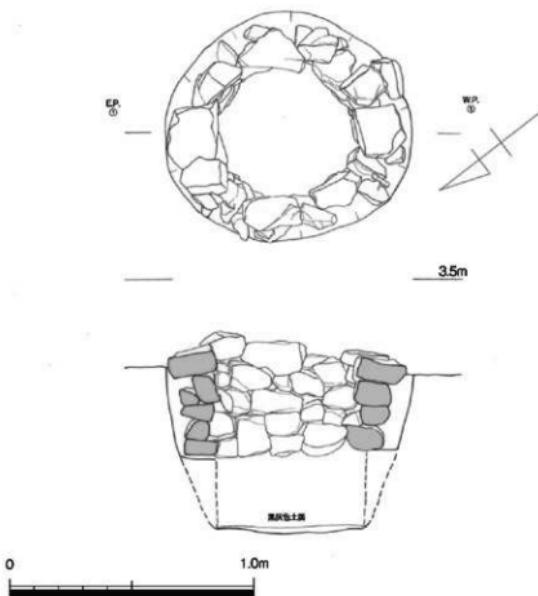


図12 石組井戸SE02遺構実測図 (1/20)



図13 石組井戸SE02出土遺物実測図 (1/3)

## (2) 石積土坑SX03（図14～16、図版4・5）

第1面の標高3.20mで検出された石積土坑。内法は南北110cm、東西90cm。長方形プランの掘り方の四周に礫を積み上げている。床面には青灰色の土層に厚さ5～7cmの砂質土を三和土状に搾き固めている。

基底部には大ぶりの石が用いられている。石材は、花崗岩など火成岩が多く、堆積岩は少ない印象をうける。2次焼成によって赤味を帯びた礫が多く含まれている。東9段、西7段、南7段、北6段が現存し、最も残りの良い東壁で高さ約90cmを遺存している。標高2.8mより上部は礫の積み直しが行われている。

東壁の見通しに擂鉢がみえるが、遺物は、石積内の埋土からはほとんど出土していない。陶磁類の多くは、石積の裏込めから検出された。

### 出土遺物

6～9は明の青花である。6は、16世紀前半の青花蓮子碗。7は花卉文の青花で葵筒底。8の青花は葵筒底。9の青花は草木を描く。葵筒底の周りに蕉葉文を回らす。いずれも景德鎮窯。

10～15は備前の擂鉢。17～20は瓦質土器。18は口縁下に四割菱の印文を施す。19は車輪文様、20は花文様の印文がみられる。21は火鉢の隅の破片である。22は龍泉窯の碗の底部破片。外底部に墨書きがみられる。23～28は土師皿。いずれも糸切り底である。

石積土坑は14世紀頃、博多浜の北に築造されるようになり、15・16世紀になると息浜で多く確認されるようになる。地下蔵とする意見もあるが、遺構のはっきりした性格はわかっていない。本例の石積土坑は、明の青花などから16世紀を上限とする時期の収蔵施設の類とみられる。

北側の78次調査では145遺構150cm×90cm、151遺構180cm×130cmの石積土坑が検出されている。145遺構では基部に砂岩質の方柱形石造品の頭部が用いられていた。151遺構では明青花のほか朝鮮の粉青沙器が出土している。時期は16世紀後半に比定されており、232次調査で確認された石積土坑SX03の時期と同列に捉えることができる。

### 【参考文献】

田上勇一郎2008「蔵・便所」「中世都市・博多を掘る」海鳥社

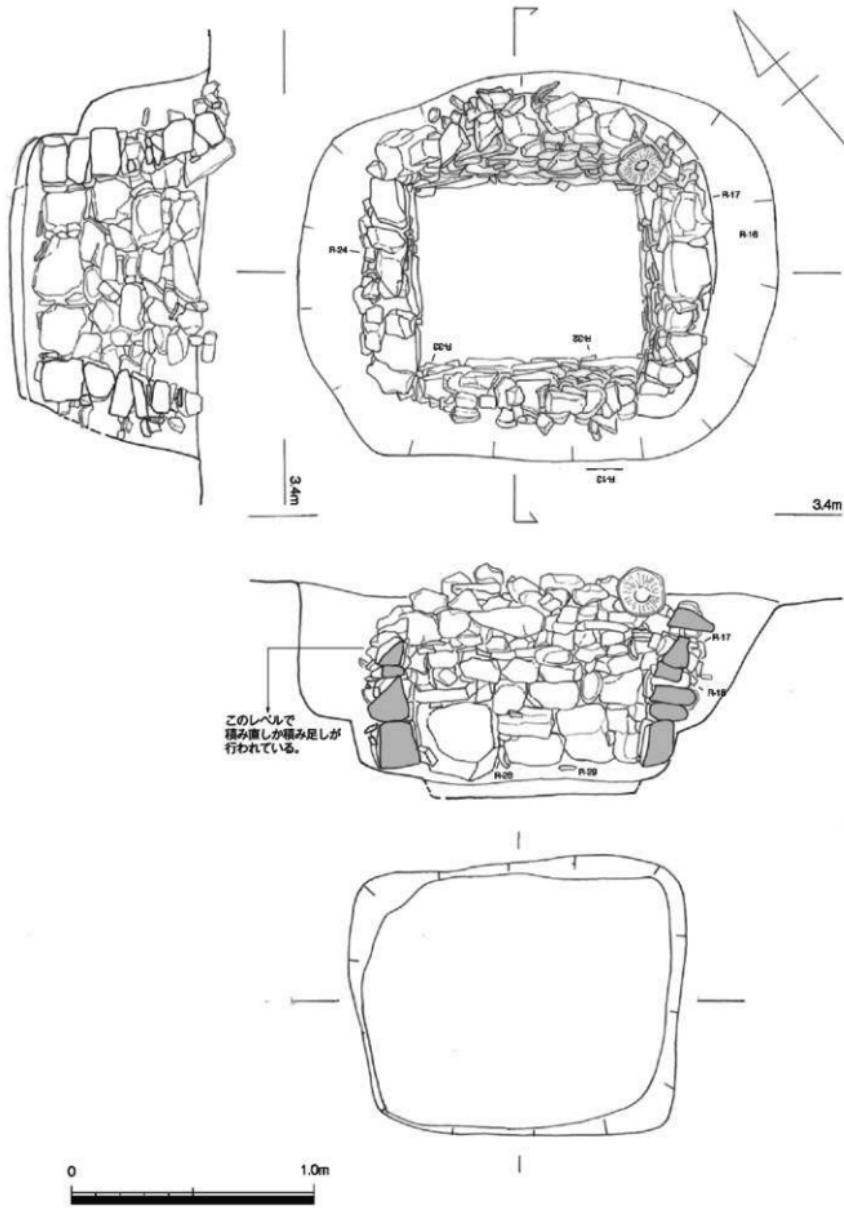


図14 石積土坑SX03遺構実測図（1／20）

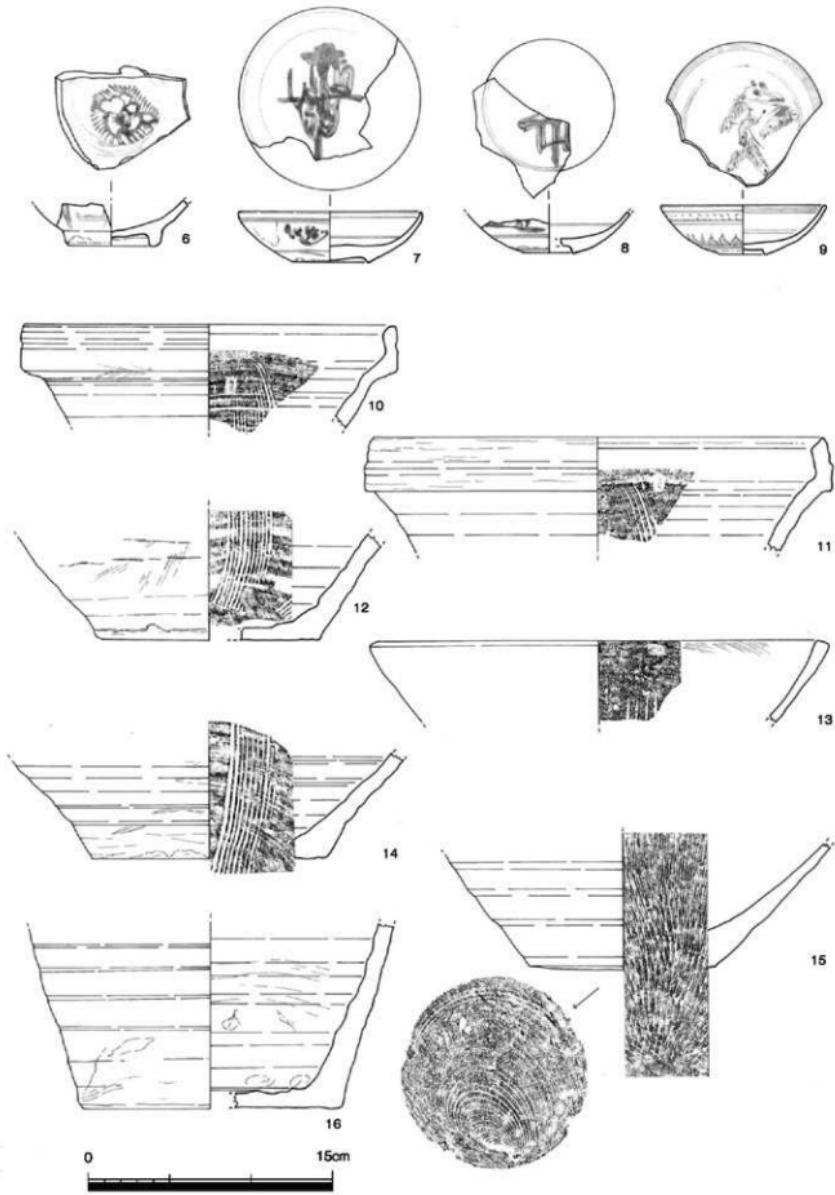


図15 石積土坑SX03出土遺物実測図1 (1/3)

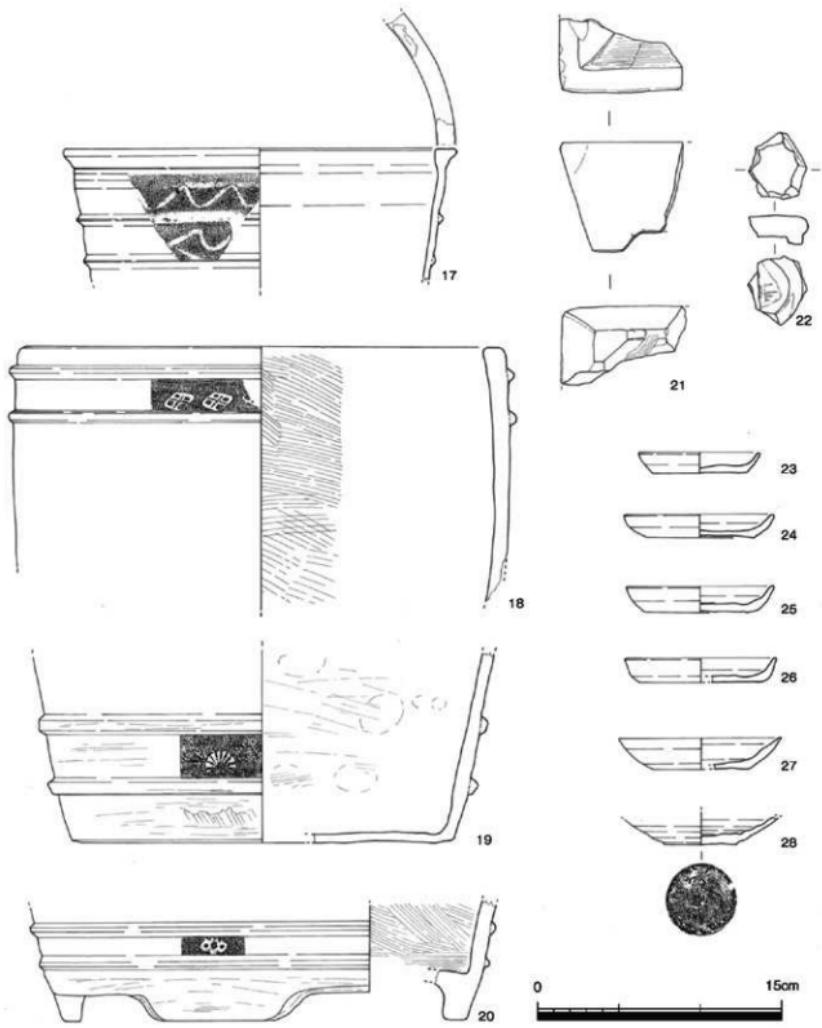


図16 石積土坑SX03出土遺物実測図2 (1/3)

(3) 井戸・土坑 (図17~18、図版7~9)

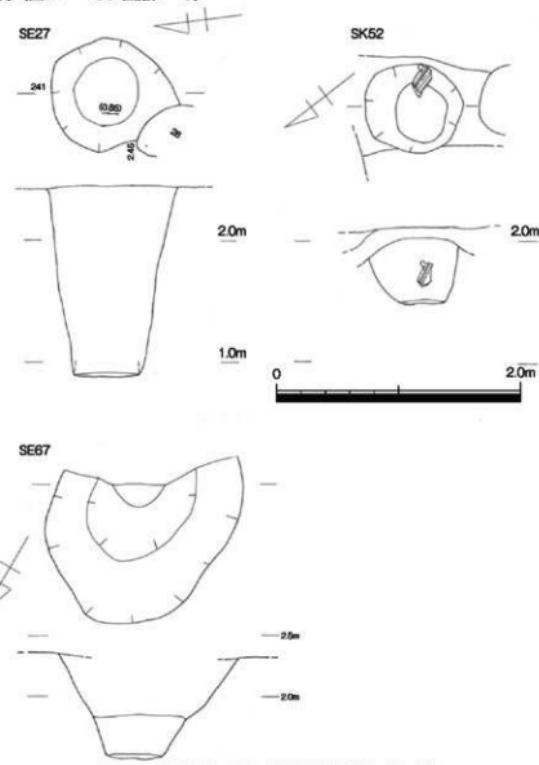


図17 井戸SE27・67、SK52遺構実測図 (1/40)

**井戸SE27**

調査区北東の第3面標高2.4mで検出された。掘削の結果、標高0.9mで径50cmほどの井筒の痕跡を確認したが、井筒の掘方は確認できなかった。埋土から政和通寶が出土した。

**井戸SE67**

調査区南東の第2面で井戸の掘り方を確認した。掘削は、第4面の掘り下げた段階で行った。径1.5mの掘鉢状の掘方を確認し、標高1.8mで二段目の掘削を確認した。標高1.5mで井戸の底部となる。井筒の痕跡は確認できなかった。埋土は黒色の粘質土である。

**土坑SK52**

第3面で検出された大型土坑もしくは溝SX40を掘削した時点で砂層に掘りこんだ土坑SK52を確認した。本来第4面の遺構である。径70~80cmで深さは約50cm。土坑の中ほどで石造台座の破片が出土した。埋土は暗茶褐色の砂質土で、共伴遺物は見られなかった。

井戸SE48

29は、無釉陶器の小皿。本来は8弁の意匠で、底部は糸切りである。32~37は糸切り底の土師皿。

井戸SE67

38は白磁の底部を打ち欠いた瓦玉である。39の土製品は人形などの足とみられる。46は白磁碗。40~54は土師器の皿や壺。いずれも糸切り底である。

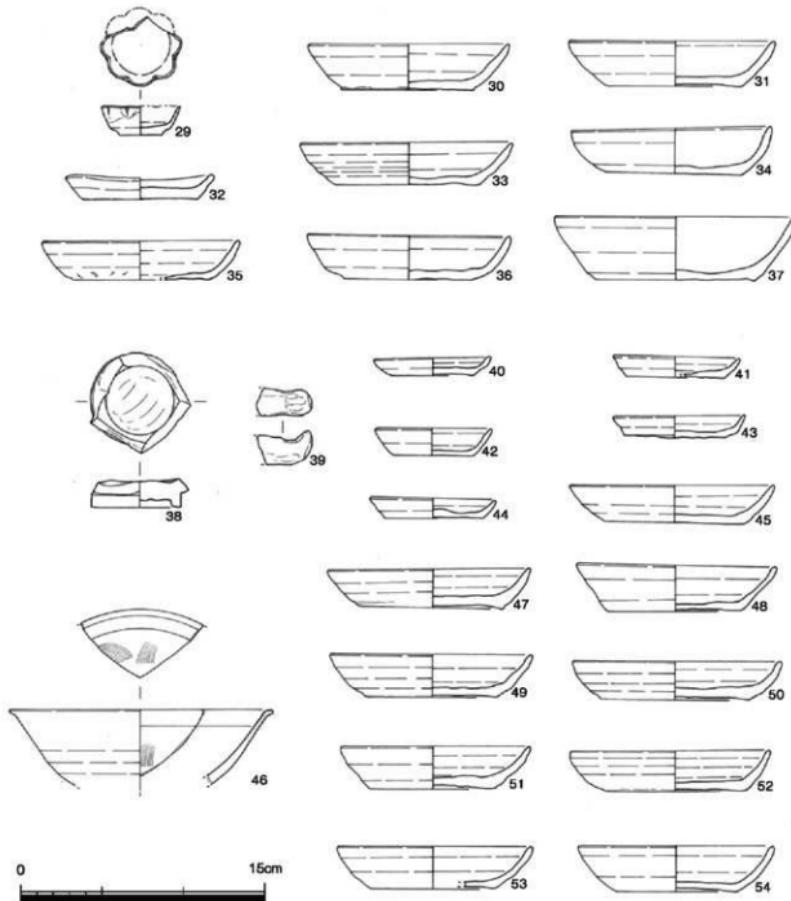


図18 井戸SE48・67出土遺物実測図 (1/3)

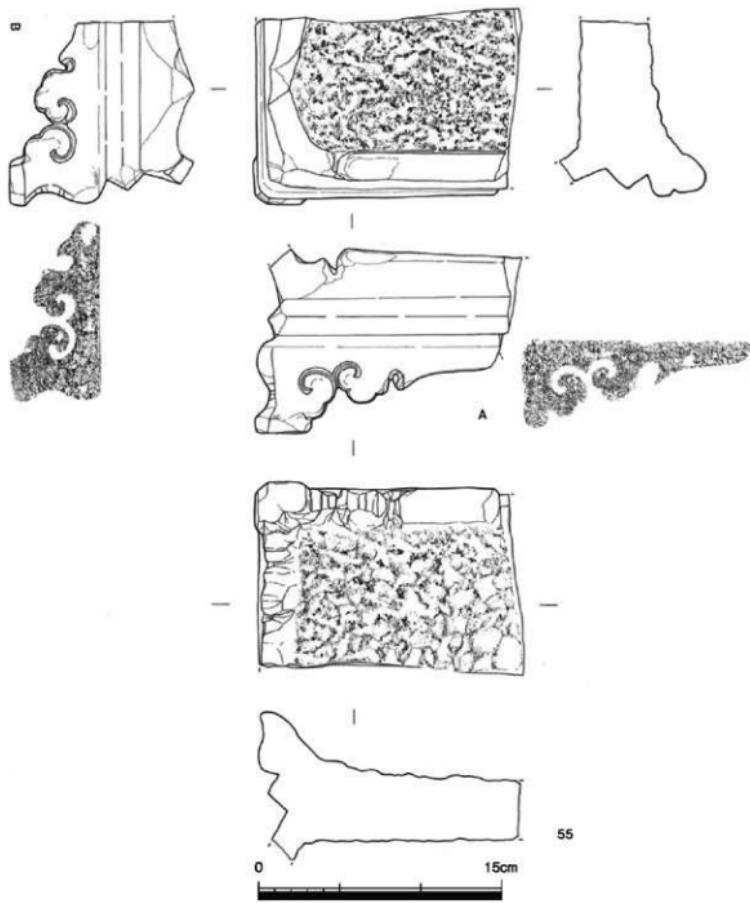


图19 土坑SK52出土遗物实测图 (1/3)

### 石造台座（図19、巻頭図版2・図版7）

基盤の砂層を掘りこんだ土坑SK52から赤味を帯びた凝灰岩質の石造台座が出土した。

ここでは遺存状況のよい面をAとして説明する。現存高11.2cm、Aの最大幅は15.0cmをはかる。脚台はAB両面とも深さ3mmほどの明瞭な蝶足が彫られている。Aの脚上部の角から14.6cmで如意頭文の中心となるためA面の幅は29.2cmに復元される。如意頭文の裾にはコンマ形の彫り込みが両面に見られる。彫り込みの脚側の位置は、ABとも脚上部の角から7.6cmにある。

脚台の上部は須弥壇のような2段の台座となっており、1段目の断面は後線が明確な三角形で、上段の両部はせり上がっている。またA面で両側からの穿孔が確認された。脚台にある如意頭文裾に通底する意匠で、装飾と同時に台座としての安定感を併せもたらしたものかもしれない。

台座表面はつやを抑えた水磨きが施されており、脚の内側および台座の受部には整による工具痕がみられる。如意頭文裾の彫り込みの位置はABとも隅から同位置にある。

石材について、大木公彦氏（鹿児島大学）のご教示によれば、典型的な梅園石ではないが、梅園石の層準に近いと考えられる。粒子が粗く、0.3mm前後（中粒砂）で淘汰は比較的悪い。少量の雲母も含まれ、有色鉱物が濃集している部分がある。また、空隙があり、鉱物の抜けたあとと考えられる。黒色の異質岩片が多いとの所見をいただいた。

### 溝SD40（図7・20、図版6）

第3面の南側で検出された東西方向の断面U字形の溝。幅は約3.0mで深さは0.8m程度。周辺域の調査で延長部は確認されていない。

56は、輪状釉剥ぎの白磁碗。外底部に墨書がみられる。57・58は磁器の底部を打ち欠いた瓦玉である。59は土錐。60は丸瓦の破片。外面に繩目痕がみられる。

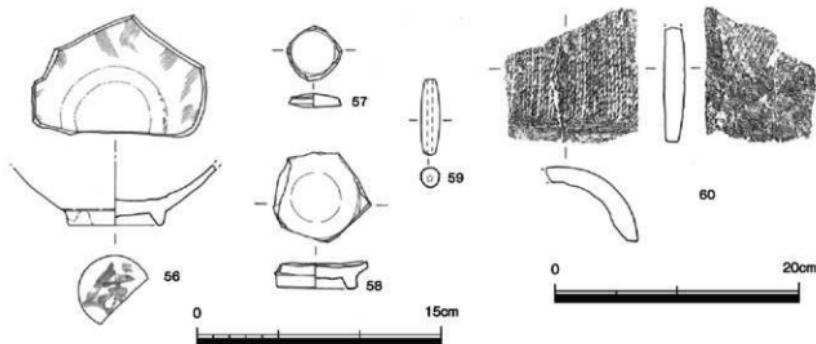


図20 溝状造構SD40出土遺物実測図（1／3・1／4）

### 陶磁器・土器類 (図21~24)

61は磁器の底部を打ち欠いた瓦玉。62は瓦質の蓋。肩部に縱方向の耳を付し、花文の印を施す。63は櫛描文の青磁皿、64は櫛描文の青磁碗である。65・66は12世紀中頃から後半の輪状釉剥ぎの白磁碗。66の外底部には墨書がある。67は磁窯窓（福建省）の縁釉盤の底部である、刻花。胎土は褐色を帶びている。68は12世紀前半の建窯（福建省）の天目碗。胎土は黒灰色を帶びている。69は12世紀中頃の白磁碗。70は明の青花で菖蒲底の周りに蕉葉文を回らす。71も明の青花。72・73は土錐。74は火鉢の破片。口縁部に印花文がある。75は朝鮮陶磁の象嵌のある碗。76は肥前系陶磁の柒付碗。外底部に「大明□□」の文字あり。77は瓦質土器の小片。丁字文が描かれている。78は器皿の底部を打ち欠いた瓦玉。79は朝鮮陶磁の粉青沙器、象嵌蓋の肩部である。80は華南三彩の系統をひく青釉の小皿。外底部に「福」の一部が型押しされている。81・82は墨書のある白磁片である。83は国産陶磁で、外底部に仮名文字の墨書がある。84・85は白磁の底部を打ち欠いた瓦玉。86は瓦器梶の底部で外底に「+」の線刻がある。87の龍泉窯系青磁は、見込みに「金玉満堂」の押印がある。

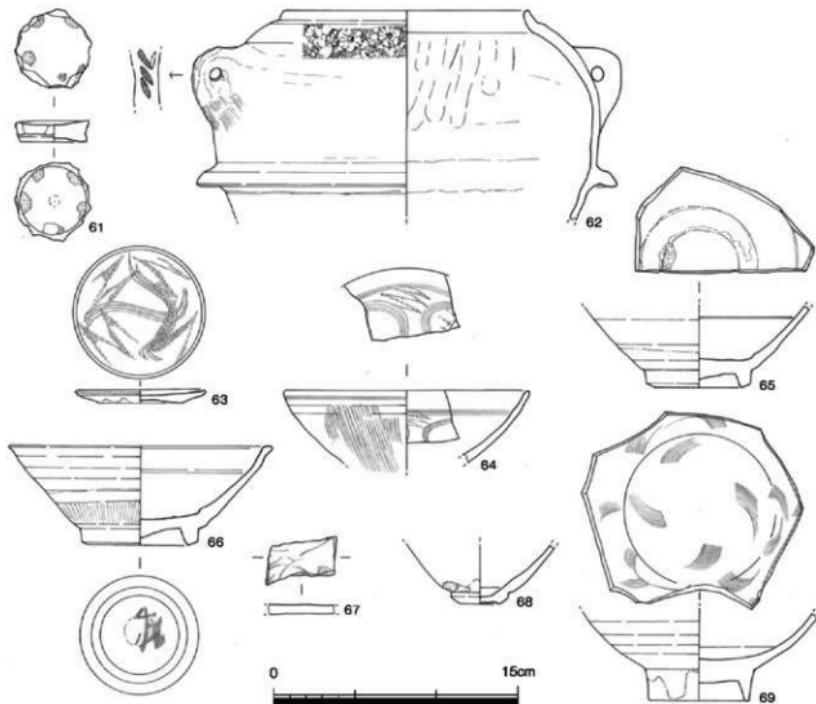


図21 出土遺物実測図 1 (1/3)

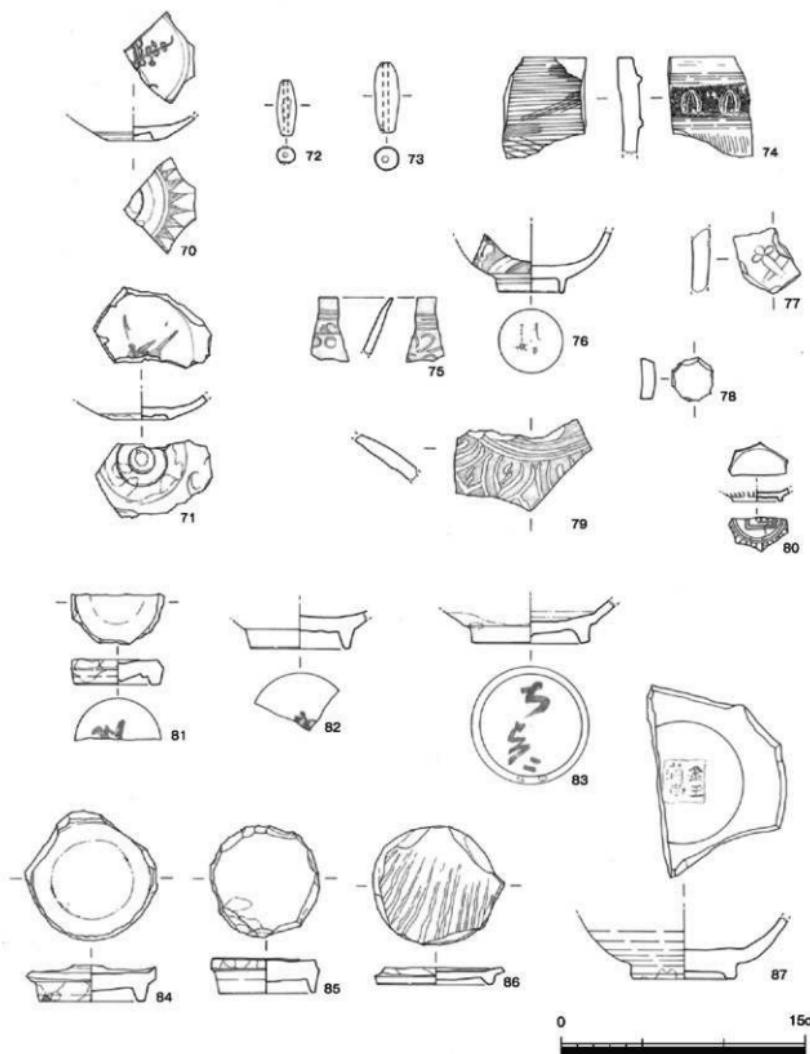


図22 出土遺物実測図2 (1/3)

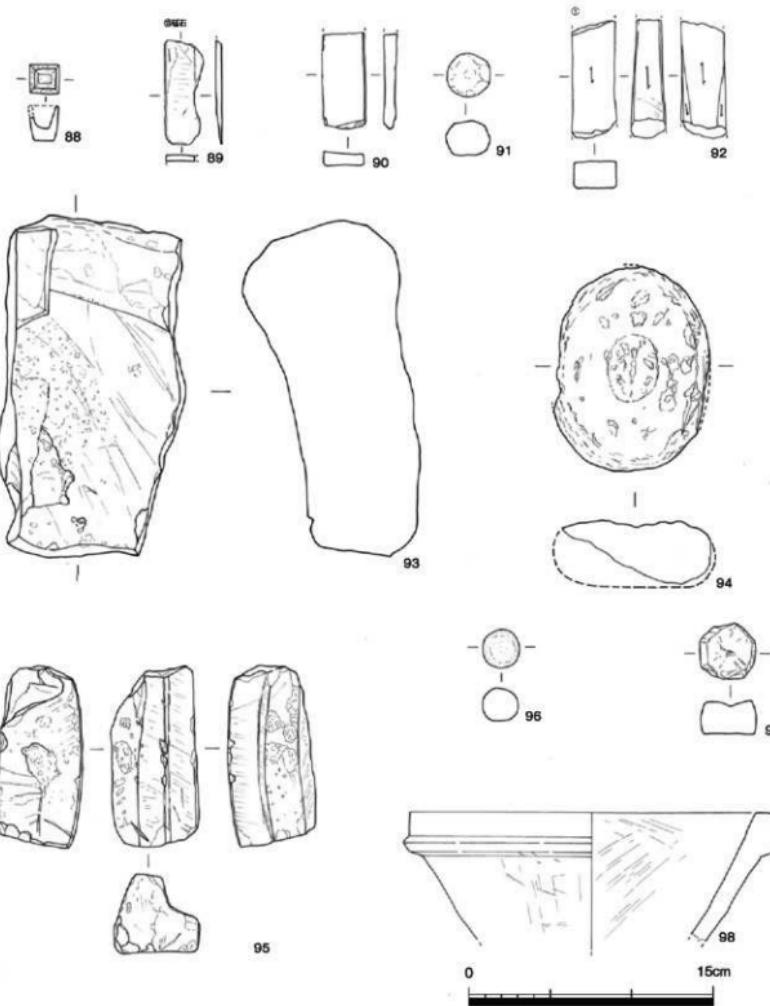


図23 出土遺物実測図3 石器・石製品 (1/3)

### 石製品（図23）

88はSX03の掘り方で出土した滑石製のミニチュア石器である。高さは21cmで裁頭方錐形を呈している。89は扁平な砥石の残欠。90は砥石で上端が折損している。91は遊具の石球で径は26cmほどである。SE67で出土した砥石の破片である。

93は第3面の南端で検出された礫で、礫石などを砥石に転用したとみられる。94は中央に敲打痕跡がある石製品で、長軸で12.4cmをはかる。95は石鍋の転用品で、鍔状の部分を持ち手としたものである。96は石球で径は23cmほどである。97は滑石製の石製品で中央に窪みがあるが貫通していない。石鍋を転用しようとしたものか。98は滑石製の鍋の破片である。底部がすぼまるタイプで復元口径22.4cmをはかる。

### 瓦類（図24）

99は軒平瓦で、中央の宝珠文から派生する唐草文を意匠としている。近世井戸の掘り方から出土した。100は巴文の軒丸瓦で2cmほどの間隔で珠文を配している。101は玉縁をもつ丸瓦で外面は繩目叩きの痕跡、内面は布目圧痕が観察される。102・103は丸瓦の破片で外面は繩目叩きの痕跡、内面は布目と模骨の痕跡が観察される。

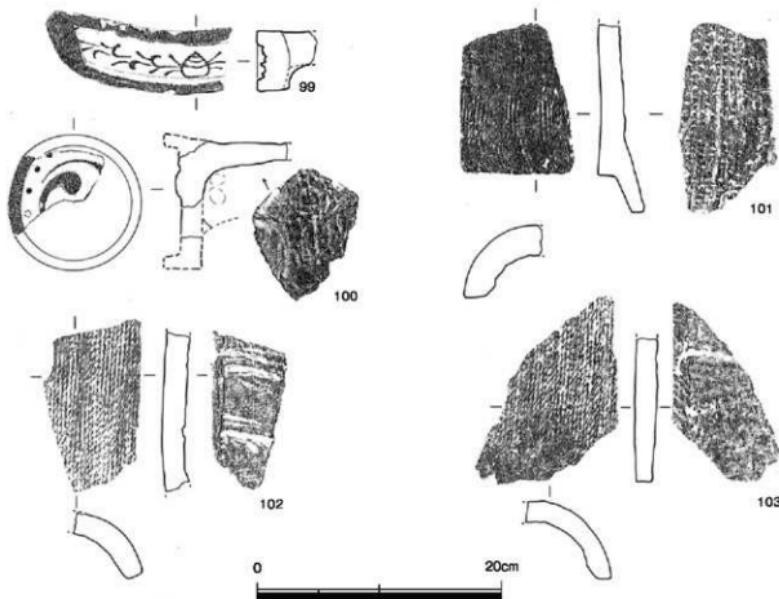


図24 出土遺物実測図4 瓦類（1/4）

#### (4) 金属器・錢貨 (図25、図版10)

金属製金具 104

1・2層遺構検出面。幅18cm、高さ20cmで奥に曲がっている。透かしによる植物文様の表現がみられる。上部に板状の金具の先端を挿入して広げ固定している。内側には木質の繊維痕が付着している。

政和通寶 105

井戸SE27出土。径24cm。北宋、徽宗政和年間1111~1117年鑄、隸書体。

皇宋通寶 106

溝SD40出土。径25cm。北宋、仁宗寶元二1039年始鑄。

天□元寶 107

1~4層遺構検出面。径24cm。2文字目が不明。天聖元寶なら北宋、仁宗天聖元1023年始鑄、天盛元寶は西夏、仁宗天盛年間1149~1169年鑄。

正隆元寶 108

1~4層遺構検出面。径24~25cm。金、海陵王正隆年間1156~1160年鑄。

熙寧元寶 109

3~4層遺構検出面。径24cm。北宋、神宗熙寧年間1068~1077年鑄。

周□□□ 110

3~4層遺構検出面。径24cm程度。欠損が著しいが周元通寶であれば後周、世宗顯德二955年鑄。

#### 【参考文献】

国家文物局<中國古錢譜>編撰組編1989『中國古錢譜』文物出版社

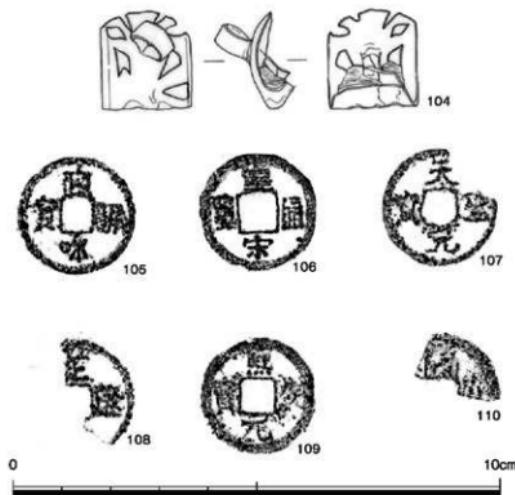


図25 出土遺物実測図5 金属器 (1/1)

## IV.まとめ

今回の調査は限られた面積ではあったが、沖の浜（息浜）砂丘西部の12世紀から近世にかけての様相の一端が明らかとなった。

戦国期の石組井戸SE02では、再利用した板碑や石臼が検出された。石積土坑SX03は、周辺の石積土坑の分布との関連を示している。各遺構面の概要を以下に記す。

- 第1面：3.3m 中世末～近世 黄褐色土層 石組井戸（最下面で2.5m）には板碑を転用したもの複数あり。近世の石積土坑からは16世紀代の明青花や備前の描鉢が出土。
- 第2面：2.7m 中世後半。黒灰色土層 土器の細片を多く混入した整地面を確認。
- 第3面：2.4m 中世前半。暗黄灰色砂層 北側の井戸SE27の最下面のレベルは0.85m。調査区の南で東西方向にはしる深さ0.8mの溝状遺構を確認。
- 第4面：2.0m 古代～中世。黄灰色砂層（地山）。第3面の溝に切られた黄灰色砂層を掘りこんだ土坑SK52 から石造台座が出土。

出土遺物で注目されるのは土坑SK52で出土した石造台座である。脚部の蝶足が、単なる装飾ではなく、実際に脚として機能する構造で裏側まで削り込まれた特徴は、13世紀代を主体とする「薩摩塔」の意匠とは、様相を異にしている。

首羅山遺跡に代表される九州北部の薩摩塔は、博多湾岸部の発掘調査では箱崎遺跡84次調査や博多遺跡群213次調査など出土事例は限られている。今回、石造台座の存在が明らかになったことでこれまでの出土資料との対比によって新たな知見が追認される可能性が出てきた。

石造台座のような寺院などの什器類と薩摩塔や宋風獅子などの祭祀遺物では、蝶足が脚台としての機能を有していたのか、当初から装飾的な意匠であったかによって型式変化の系譜は異なるであろうし、資料がおかれている環境によっても劣化の度合いには差が生じたと考えられる。

石造台座は、寧波周辺を産地とする中国瓦が博多・箱崎に集中的に分布することから中国系の祠堂などの什器であった可能性もある。ともかく中国系祭祀遺物を傍観した石造物としての評価がまたれる。

報告書の作成にあたり石造台座については、大木公彦氏（鹿児島大学）、高津 孝氏（鹿児島大学）、佐藤 亜聖氏（元興寺文化財研究所）、井形進氏（九州歴史資料館）の諸先生方から多くのご教示を賜った。また陶磁器については田中克子氏（アジア水中考古学研究所）からご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。

### 【参考文献】

- 高津 孝、大木公彦、佐藤亜聖 2019博多・箱崎調査報告書191127\_191209改訂版
- 久住猛雄（編） 2019「箱崎58」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1373集、福岡市教育委員会
- 田中克子 2019「日宋貿易期国内最大の流通拠点「博多」にもたらされた中国陶磁器－一国内消費地との比較材料として－」『貿易陶磁と東アジアの物流－平泉・博多・中国－』高志書院

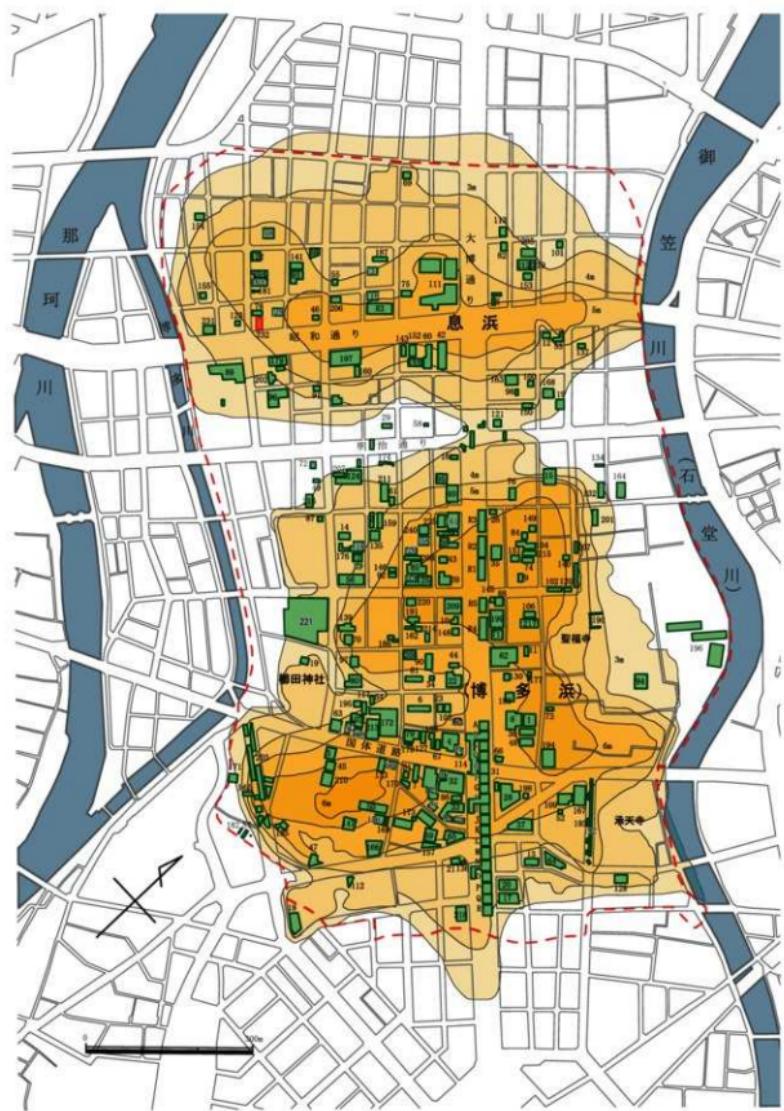


図26 博多遺跡群における調査地点 等高線は都市計画図の標高を基準とする



232次調査着手前の状況（南東より）



第1面 調査風景 着手時（北より）

図版2



第1面 調査風景（北より）



石組井戸SE02作業風景（東より）



石組井戸SE02（南より）



石組井戸SE02掘削時（南より）

図版4



石積土坑SX03（南より）



石積土坑SX03（東より）



石積土坑SX03作業風景（南より）



石積土坑SX03（北より）



石積土坑SX03西壁裏込（西より）



石積土坑SX03基底部（東より）

図版6



第3面 溝状造構SD40（北より）



第3面 配石造構SX26（北より）



第4面 土坑SK52（北より）



石製台座出土状況 土坑SK52（南東より）

図版8



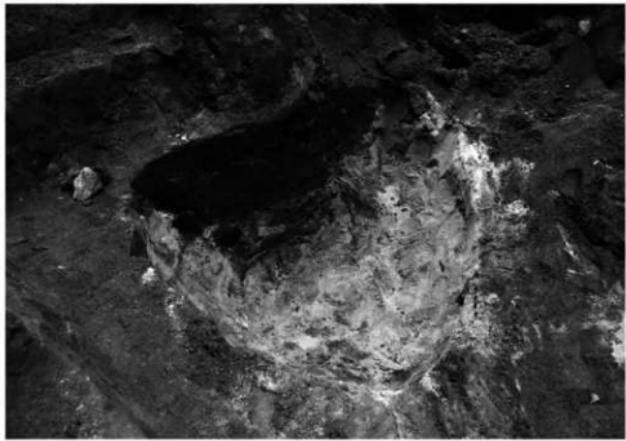
第4面 調査風景（北より）



井戸SE27（南より）



第4面（北より）

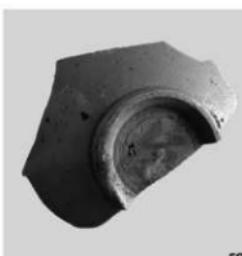


井戸SE67（南より）

図版 10



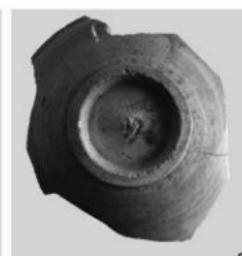
2



56



63



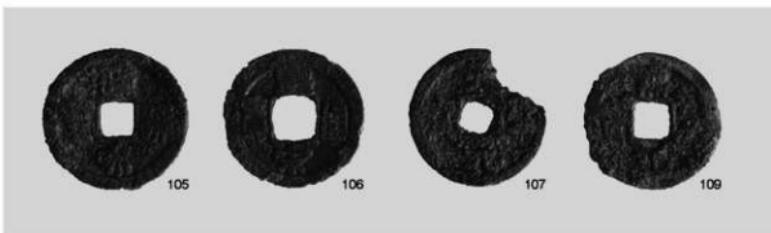
66



29



104



105

106

107

109

政和通寶

皇宋通寶

天元通寶か天聖元通寶

熙寧通寶

博多232次調査出土の遺物（板碑・墨書き陶磁器・金属製品）

## 報告書抄録

# 博 多 178

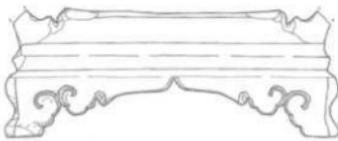
—博多遺跡群第232次調査の報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1421集

令和3年3月25日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 株式会社ホンド印刷  
福岡市東区松田3丁目10-32

The General Report on  
the 232<sup>nd</sup>. Survey of Hakata Ruins



2021 Mar.  
Board of Education of Fukuoka City